

# 『夜の鶴』と即詠歌

瀧 倉 朋 世

はじめに

『夜の鶴』は「さりがたき人」の依頼で、阿仏尼が著した歌論書であるが、これまで様々な研究が行われてきた。「さりがたき人」が誰かについて諸説はあるが、細谷直樹氏<sup>(1)</sup>により、惟康親王の北の方と推定された。さらに惟康親王の北の方におくった後、はしがきをつけ、為相におくられたと考えられている<sup>(2)</sup>。また、定家や為家の歌論と比較検討し考察された小野寺捷氏<sup>(3)</sup>、大伏晴美氏<sup>(4)</sup>、河南奈都子氏<sup>(5)</sup>、長崎健氏<sup>(6)</sup>、田淵旬美子氏<sup>(7)</sup>ほかの方のご論考がある。注釈は、森本元子氏<sup>(8)</sup>によって行われた後、武井和人氏<sup>(9)</sup>により改めて行われている。上村悦子氏<sup>(10)</sup>、長崎健氏<sup>(6)</sup>らは、日常的な場で詠まれた即興的機知のきいた和歌について

書かれた末尾の章段について論じている。当論文はその章段を取り扱うこととする。阿仏尼が生きた時代は与えられた歌題を詠むことが主流だったが、どうして阿仏尼は即詠歌について述べたのか。また、そこで取り上げられている歌人に小式部内侍、周防内侍の名前があるが、どうしてこの二人を選んだのか。阿仏尼の即詠観を検討しながら、それらについて考えてみたい<sup>(11)</sup>。

## 一 『夜の鶴』の最終章段

『夜の鶴』は主に『詠歌一体』の影響を受け、消息体で、題詠、本歌取り、制詞、作歌に対する態度、歴代勅撰集の特徴などについて記述している。小野小町の百夜通い伝説、『大和物語』の生田川伝説、また歌には時代変化とともに不易なもの

あること、『古今集』以下の勅撰集の特色、昔の勅撰集の優れた歌人にならぬさい、などと古典を尊重する精神がみられる。また、題の心を会得すべきとし、定家の「遇不逢恋」の和歌、本歌取りの名人として俊成卿女をあげ、近代歌人の名句を安易にまねるべきでないことや題に関して注意すべきこととして俊成の例歌をあげて説明している。続いて『新古今集』、『新勅撰集』、『続後撰集』の特色について述べ、近い世代も称賛し、その隆盛ぶりを記している。

その最終章段は次のようにある。<sup>12)</sup>

又取り敢へぬことに時もかはらず詠み出づる歌の返し、立ちながらいひいだす歌はさしあたりてただ今いひたき事をさまよくつづけ候ぬれば何の風情にも過ぎて候。小式部内侍、定頼中納言をひきとめて「まだふみも見ず天の橋立」と申しける事や、周防内侍、忠家大納言と、「かひなくたむ名こそ惜しけれ」と申かはしける心とさなどは、ただ人の心たましるにより歌のみちにしほなれぬる位のあらはるるにて候へば、むかしいま申すにもおよび候はず。今はかかる谷のくち木と成はてて候ともさるやさしき人々だに候はば、などかは口とくあひしらふ事も候はざらむとおぼえて、その世の人々うらやましくこそ候へ。

「心とさ」「口とくあひしらふ」ことを賞賛し、それができる歌人として、「ただ人の心たましる」によると評しながら、女房歌人である小式部内侍と周防内侍を取り上げている。「心とさ」「口とく」は後述するが、阿仏尼の「あひしらふ」例として、まだ為家と恋愛していた頃の贈答歌が『玉葉集』や『風雅集』に採られている。『玉葉集』には、恋二・一四五六、一四五七、恋四・一六八八、一六八九がある。『風雅集』には、恋二・一〇九六、一〇九七、恋二・一一〇一、一一〇二、一一〇四、一一〇五がある。<sup>13)</sup>

女のもとへ、ちかきほどにあるよしおとづれて侍りければ、今夜なむ夢にみえつるはしほがまのしるしなりけり、と申して侍りけるに、つかはしける

前大納言為家（恋二・一一〇四）

ききてだに身こそこがるれかよふなる夢のただちのちかのしほがま

返し 安嘉門院四条（恋二・一一〇五）

身をこがすちぎりばかりかいたづらにおもはぬ中のちかのしほがま

「千賀の塩竈」とは、陸奥の歌枕で、「千賀」と「近」を掛ける。この和歌を詠みあう直前に成立した『続後撰集』に二首（恋

二七三八、八一二）為家が撰んでいる歌の表現で、阿仏尼はそのことをふまえたやり取りである。為家が近くまで来ていることを知らせたら、阿仏尼が今夜夢にあなたが見えたのは「千賀の塩竈」ではないですが、近くまでいらして下さっていたからなのです、といい、為家が詠んだ一一〇四の和歌に返歌している。機知のきいた和歌である。

前にあげた文末「さるやさしき人々に候はば、などかは口とくあひしらふ事も候はざらむとおぼえて、その世の人々うらやましくこそ候へ」と阿仏尼は記しながら、夫、為家のことを思い出したに違いない。

ところでここには小式部内侍の「大江山いくの道のとをければまだふみもみず天の橋立」、周防内侍の「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそ惜しけれ」が引かれているが、どちらも『百人一首』に撰ばれた歌で、これらの詠歌時には貴公子が同席していた。小式部内侍には定頼中納言、周防内侍には忠家中納言である。貴公子たちはそれぞれ女房をからかったが、それに対し、即詠でその場に合った機知のきいた秀歌が詠まれた。阿仏尼は小式部内侍、周防内侍のことをどのように思ったのだろうか。和歌史上、多くの女房歌人がいた中でこの二人を取り上げた理由を小式部内侍、周防内侍の歌人的評

価から考えてみたい。

## 二 女房歌人の評価

小式部内侍、周防内侍の詠歌に共通するのは、どちらも勅撰集、小式部内侍は『金葉集』、周防内侍は『千載集』に採られ、二人とも女房として宮仕えの折に詠んだ歌であったことなどである。

まず、『百人一首』にも採られた「大江山」の和歌を『金葉集』二度本の詞書とともにひく。

和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みやこに歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけるを定頼卿つぼねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらんなど、たはぶれてたちけるをひきとどめてよめる

小式部内侍

おほえやまいくのみちのとほければふみもまだみずあまのはしだて  
(巻九 雑上五五〇)

小式部内侍の歌人としての評価は『玄玄集』『後拾遺集』か

ら始まり、『俊頼髓』『金葉集』『詞花集』へと展開する。「大江山」の和歌については『俊頼髓』でとりあげられ、『金葉集』二度本に入集し、『袋草紙』などで取り上げられ、鎌倉時代では『無名草子』『十訓抄』などに見える。この和歌について小山順子氏は「大江山と生野を歌枕として定着させる和歌となった。更に、大江山と生野は、一首の中に共に用いられることが定型となる。」と述べている。この和歌は歌枕の歴史に影響を及ぼしそれとともに、小式部内侍が即詠の達人であるという評価が定着したと考えられる。

後に『新古今集』巻七（七五二）「平治元年、大嘗会主基方、辰日参入音声、生野をよめる 刑部卿範兼 おほえ山こえていくののすゑとほみ道あるよにもあひにけるかな」や『拾遺愚草』中（一九三九）「海橋立 ふみもみぬいく野のよそにかへる雁かすむ浪間のまつとこたへよ」が影響歌として指摘できる。『十訓抄』には小式部内侍の登場する話は三つある。

一ノ二十一話では、直前は清少納言の振る舞いを称賛、一条朝には雅やかな女房たちがたくさんおり、その中に小式部内侍の名もあげられている。

三ノ一話は、「大江山」の和歌がみえ、小式部内侍の歌の才能を語るのに「大江山」の和歌とその時の場面の紹介がなされ

ている。

十ノ十四話は、小式部内侍がまだ子どもだった頃大きな病気をし、辞世の和歌「いかにせむいくべき方を思はず親にさきだつ道をしらねば」を詠んだ。この和歌は説話から広まったので真作と言い切れないが、ここでは後宮の女房、小式部内侍は歌才があり、歌で自らの病を治し、自らの評判を上げたのである。

『無名草子』に小式部内侍の記載が、小野小町、清少納言の評の後に取り上げられている。そのことは『無名草子』の中では大きく評価されていることが窺われる。<sup>16)</sup>内容は、夭折した小式部内侍と清少納言を比較し、小式部内侍を「誰よりもいとめでたし」としている。中宮彰子に仕えていたが、死後も彰子から着物を贈られたり、多くの男性（定頼、頼宗、教通、公成）が夢中になったとある。教通との間には静円、公成との間には阿闍梨、その他、女子がいたらしいが、子どもを残して亡くなったということが「小式部の内侍こそ、誰よりもいとめでたけれ。」という評価につながっている。

『無名草子』の作者は、俊成卿女ともいわれているが、小式部内侍を宮廷女房として絶賛している。俊成卿女といえ、阿尼の和歌観や人生観に多大な影響を及ぼした人でもある。<sup>18)</sup>

その他、「大江山」の和歌は、定家が、秀歌撰、『定家八代抄』

『八代秀逸』『百人秀歌』『百人一首』に採用し、後鳥羽院撰の『時代不同歌合』、撰者不明の『女房三十六人歌合』にも採られている。

次に周防内侍の『百人一首』に採られた「春の夜の」の和歌を『千載集』の詞書とともにひく。

二月ばかり月あかきよ、二条院にて人人あまたぬあか  
して物がたりなどし侍りけるに、内侍周防よりふして、  
まくらをがなとしのびやかにいふをききて、大納言忠  
家これをまくらにとてかひなをみすのしたよりさしい  
れて侍りければ、よみ侍りける 周防内侍  
春のよの夢ばかりなるたまくらにかひなくなたたん名こそを  
しけれ

といひいだし侍りければ、返事によめる

大納言忠家

契ありてはるの夜ふかきたまくらをいかがかひなき夢にな  
すべき (巻十六 雑上九六五)

この和歌は『定家八代抄』、『女房三十六人歌合』『新時代不同歌合』などにもみえる。「腕」を枕とし、「かひなく」は「甲斐なく」と「腕」の掛詞で、「ゆめばかりなる手枕に」「かひなく

たたむ名」と相手を軽くかわし、王朝サロンの幻想的で、妖艶な美を詠い上げている。<sup>20</sup>後に「ころもさぞただうたたねの手枕にはかなくかへる春の夜の夢」(『拾遺愚草』一六〇四)と定家が本歌取りしている。

さらに周防内侍の代表歌三首を取り上げて、その受容について検討してみたい。まず寛治七年(一〇九三)五月五日郁芳中院根合で詠んだ和歌があり、『金葉集』二度本の詞書とともにひく。

郁芳門院のねあはせに恋の心をよめる 周防内侍

こひわびてながむるそらのうき雲やわがしたもえのけぶり  
なるらん (巻八 恋下四三五)

『俊頼髓腦』は、周防内侍の詠歌を世間では良歌だと評判になつていたが、ある人は、「燃えている煙が上句のように雲となつて空にたなびくのは縁起の良いことではない」と言っていたと伝えている。<sup>21</sup>しかし、俊頼は『金葉集』に採っている。この和歌を俊成卿女が本歌取りした歌が『新古今集』に採られている。(後の世にこの和歌から「下萌えの少将」と称されたようだ。)

五十首歌たてまつりしに、寄雲恋

皇太后宮大夫俊成女

したもえにおもひきえなむけぶりだに跡なきくものはてぞ  
かなしき

『新古今集』巻第十二 恋歌二 一〇八一

これは、後鳥羽院が『新古今集』恋歌二の冒頭に載せるよう  
に指示した(『明月記』元久二年三月二日の条による)。周防内  
侍がこの和歌を通して注目されていた証であろう。

『金葉集』二度本に入集している次の歌がある。

いへを人にはなちてたつとはしらにかきつけ侍りけ  
る 周防内侍

すみわびてわれさへのきのしのぶぐさしのぶかたがたしげ  
きやどかな (巻九 雑上五九二)

鎌倉時代の評価として『今鏡』『山家集』『無名抄』『隆信朝  
臣集』『今物語』『十訓抄』八ノ序、『徒然草』に引かれている。  
例えば、『今鏡』に「堀河の帝の内侍にて、周防とかいひし人の、  
家を放ちてほかに渡るとて、柱に書き付けたりける、住みわび  
てわれさへ軒のしのぶ草しのぶかたがたしげき宿かな」と書き  
たる、まだその家は残りて、その歌も侍るなり。見たる人の語  
り侍りしは、いとあはれにゆかしく。その家は、かみわたりに、  
いづことかや、「冷泉堀河の西と北との隅なる所」とぞ人は申  
しし。おはしまして御覧すべきぞかし、まだ失せぬ折に。」(打

聞・敷島の打聞)とある。

最後に『周防内侍集』(三九・四〇)には次のようにみえる。

院のつぼねに、つねにあひずみなる人の、いでたるほ  
どにまゐりてみれば、もやのみすにあふひのかれてか  
かりたるにかきつけし

かくれどもかひなきものはもろともにみすのあふひのかれ  
はなりけり

返し

かひなしとおもひもかれずあふひぐさ心をかけぬをりしな  
ければ

『徒然草』第一三八段に引かれ、嘉吉三年(一四四三)に催  
行された、『前撰政家歌合』(三三〇)を見ると畠山持純によつ  
て、本歌取りされている。

周防内侍の詠歌は、定家、俊成卿女に本歌取りされた。代表  
歌である「すみわびて」は『金葉集』に採られた後、後世評判  
を呼び、この家の所在を特定されるほどまでになった。『今鏡』  
『無名抄』などで説話化され、西行はこの家を見て感動し『山  
家集』に歌を残していることからしても周防内侍の評価は高い。

### 三 阿仏尼と即詠歌

阿仏尼が即詠歌になじみがあったかを著述から探してみたが、女房時代の日記『うたたね』には、見受けられなかった。次に、阿仏尼が娘に書いた、宮廷女房の心得『阿仏の文』<sup>(25)</sup>を確認すると「又さるべき人などまいりて候はんに、あまりに物とをく、春日野の雪朝、賀茂社の河浪などのやうには候まじく候。御かほのおき所しづかに、きちやうのはづれゆかしきやうに御入候べく候。ひちのもてなし、こはばしきやうなるは、うたてしく候。」とある。しかるべき廷臣が来られたときは奥深くこもらず冷静に適切に対応せよ、こわばって無骨なのは嘆かわしい、と述べている。機転を利かせ、その場に合うよう即対応をすることも女房歌人としての務めだったことが窺われる。

『十六夜日記』によれば、鎌倉へ旅に出るにあたり、阿仏尼が、為相に代々書き残された歌の書物の中で伝来の確かな歌書ばかりを選び、贈った。その折の贈答歌が載っている。

和歌の浦にかきとどめたる藻塩草これを昔のかたみと

は見よ

あなかしこ横浪かくな浜千鳥ひとかたならぬ跡を思はば

これを見て、侍従のかへりごと、いととくあり

つひによもあだにはならじ藻塩草かたみをみよの跡に

残さば

迷はまし教へざりせば浜千鳥ひとかたならぬ跡をそれ

と

為相が「いととく」返歌をしたのを聞き、阿仏尼は「心やすく

あはれなるにも昔の人にきかせ奉りたくて、またうちしほたれぬ」と、亡夫に聞かせたく、「しほたる」ように涙ぐんだとある。

為相の「つひによも」と「迷はまし」は即、詠まれた歌である。

また、為守が手習に次の和歌を書きつけ、受け取った阿仏尼が歌を返した場面では

はるばると行くさき遠く慕はれていかにそなたの空を

ながめむ

と書きつけたる、ものよりことにあはれにて、おなじ紙に

書き添えつ。

つくづくと空ながめそ恋しくは道遠くともはや帰り

こむ

では、阿仏尼の「つくづく」とは格別哀れな気がして、つい同じ紙に書き添えたのは、そんな時間がかかっていないように考える。続いて十月十九日、今の岐阜県大垣市辺りで

昼つかた、過ぎゆく道に目に立つ社あり。人に問へば「結ぶの神とぞ聞こゆる」といへば

まぼれただ契りむすぶの神ならば解けぬうらみにわれ  
迷はさで

昼頃、通つていく道にあつた社について人に質問したら「むすびの神と申します。」と言うので「まぼれただ」の和歌をすぐ詠んだ。断言は難しいが、状況から考え、比較的、即詠した和歌、その場に合つた和歌といえる。

さらに即詠歌を確認すると、十月二十一日、八橋を出発し、紅葉の多い山で人に地名を聞くと「宮路の山」と答えがあり、即詠とはいきれないが、機知のきいた和歌。

時雨れけり染むる千入のはては又紅葉の錦色かへるまで  
を詠み、二十二日、お供の人が「有明の月さへ笠着たり」と言  
うのを聞いて

旅人の同じ道にや出でつらん笠うち着たる有明の月  
と機知のきいた和歌を詠んでいる。

二十五日、急いでいる阿闍梨の知り合いの山伏に後深草院皇女の生母である阿仏尼の娘への歌を言づける。即詠歌といいきれないが、比較的急いで詠んだ機知のきいた和歌(26)と思われる。

我が心うつつともなし宇津の山夢路も遠き都愁ふとて

葛楓時雨れぬひまも宇津の山涙に袖の色ぞこがるる

#### 四 阿仏尼と即詠観

阿仏尼は祖父である平繁雅の一族から、後高倉院と北白河院、その子安嘉門院と後堀河院に仕えた女房がおり、阿仏尼もまた若い頃から断続的に長く安嘉門院に女房として仕えた(27)。小式部内侍の母、和泉式部も出仕していたし、周防内侍は父が和歌六人党の一人とされる平棟仲で、母、後朱雀院女房小馬内侍も女房であつた。和歌になじみのある家の出身であることも阿仏尼との共通点である。

また『井蛙抄』(28)第六・雑談の次のような記載がある。

或人物語云、中院禪門と阿仏房とゐられたる所へ、為氏まかりて、縁にてこはづくりて、あかり障子をあけて入らんとせられけるを、阿仏房障子尻を押へて、「『あかり障子』をかくし題にて、一首あそばし候へ。あけ候はん」と申されければ、とりあへず、

いにしへにいぬきがかひしすずめの子とびあがりしや  
うしと思ひし

とよまれければ、あけてわらひて入られけり。たはぶれな



がら、にくき心にてやありけん。源承法眼の説とてかたりき。

急に入ってきた為氏に「あかり障子」をかくし題にし、一首詠んでみなさいと、和歌を請求し、為氏が『源氏物語』若紫の巻をふまえた和歌を詠んだとされている。阿仏尼の即詠歌ではないが、日常会話とし即詠歌があったと考えられよう。

『俊頼髓脳』に小式部内侍（前述した「大江山……」）のことが書かれた箇所<sup>28</sup>に即詠として連歌（この頃は短連歌）が詠まれた例がある。道信中将が山吹の花を持って后の御部屋の前を通り過ぎていると、多くの女房達に和歌を詠むことをけしかけられた。和歌の上句を詠み花を差し入れたら、部屋奥にいた伊勢大輔が即座に下句をつけた。女房達の間で日常詠んでいる和歌を連歌の形式で詠むことに抵抗がなかった。『菟玖波集』<sup>29</sup>によれば阿仏尼の次の句が残っている。『菟玖波集』に女流歌人は他に和泉式部、周防内侍も一首ずつ採られている。<sup>30</sup>

梨を焼きたりけるに焼けざりければ

前大納言為家

からくしたれとやけぬなしかな  
と有りけるに

安嘉門院四条（一九四七）

おふのうらのあまのもしほひたきさして

次に『吾妻問答』<sup>31</sup>「一、発句にも仕り様侍る哉。」にも記載がある。「為相卿母阿仏と云ふ人、東へ下り侍りけるに、長月晦日の比、ある人連歌を仕るべきよしにて、阿仏に発句を請ひけるに……かの阿仏は、安嘉門院四条とて、女房の歌よみなり。いかでか初冬の発句に、無下に心中にかなはで、か様には有るべきや。道をもつばらに教へ侍る……」と鎌倉で連歌の指導もしていたようである。

『さがかよひ』<sup>32</sup>によると、飛鳥井雅有は為家の小倉山荘において、『伊勢物語』などや和歌の指導を受けていた。<sup>33</sup> そのあと、為家と連歌をよくたしなんでいたと記載がある。例えば、文永五年九月十三日の夜、為家の会で「月前浦」「月前薄」「月前頭はる、恋」で和歌を詠んだあと

月百首の題を短冊に書きて…丑一つばかりに講じて、酒飲み連歌などして、明くれば帰りぬ。いと艶なりし夜の様なり。

また十六日には雅有が『伊勢物語』の質問をしたのち

明日よりは『源氏』をはじむべき由を語らふ。持たせる酒取り出でて、盃あまたくだり流れて、連歌して、夜更くれば帰りぬ。

とこの後も、連歌をたしなんでいる。小倉山荘では、勉強をした後、蹴鞠をしたり、食事、宴会をしたり、和歌、連歌を詠んでいる。細かく記載はないが、為家が連歌を楽しんでいる時、阿仏尼も近くでいて、一緒に詠んだり、楽しみながら聞いていたことだろう。

## おわりに

『夜の鶴』の最終章段は、「ふと思いついた」「追記」「未完成」であるとの論とは違い、阿仏尼が歌論書執筆にあたり、明確な意図をもっていた。この章段で、自分と同様の女房歌人として「ただ人」と評しながら、小式部内侍、周防内侍の詠を選んだ理由は、勅撰集に入集し、『百人一首』に選ばれたからであると考えられよう。それに加え、小式部内侍の高評価は『無名草子』にみえる。周防内侍の場合は俊成の祖父忠家とのやり取りであったことも大きい。また、別歌ではあるが、周防内侍の代表歌「こひわびて」を俊成卿女が本歌取りしたことなど、俊成卿女が存在が大きかったと思われる。

『十六夜日記』他から提示したように阿仏尼は和歌を詠みかけられて時間をおかず返歌することも得意としていたことが窺

われる。歌合、連歌会にも参加した。特にその頃、連歌の流行があり、連歌作品が残っている。また、鎌倉時代の歌人たちは、勅撰集に恋のやり取りが採られることは少なくなっていたが、阿仏尼は、為家と出会い、贈答歌を詠み、それらが勅撰集にまで採られた。後世に伝わるような、作品が残されたのは為家室であったこと、為家と「あひしらふ」ことがあったからである。『夜の鶴』で阿仏尼が、定頼や忠家のことを「さるやさしき人々」と表現しているが、阿仏尼にとっての「やさしき人」つまり風流な人、為家とのことを思い出しながら、詠歌の諸活動の中で、王朝文学を尊重、継承し、即詠を重視していたと考えられる。

## 注

(1) 細谷直樹氏『夜の鶴』再吟味』『中世歌論の研究』笠間書院 1976

(2) 森本元子氏『十六夜日記・夜の鶴』講談社学術文庫 1979

「さりがたき人」が具体的にだれをさすかについては、惟康親王（一三二六薨）の北の方という説（細谷直樹氏）のほかは示されていない。……子息為相か否かということは、今はもう問題にならない。「さりがたき人」は「さ

りがたき人」であり、「夜の鶴」を、現存本の形（はしがき付き）で、阿仏から与えられたのは子息為相であった、と考えればよいのである

(3) 小野寺捷氏「夜の鶴」に見る阿仏尼の歌論の考察」『立正大学国語国文』1971

(4) 大伏晴美氏「夜の鶴」の歌論としての考察」『解釈』1981

(5) 河南奈都子氏「夜の鶴」について」『藝文東海』1985

(6) 長崎健氏「歌人阿仏尼の位相」『古典和歌論叢』明治書院1988

(7) 田淵旬美子氏「阿仏尼」吉川弘文館2009

(8) 森本元子氏「十六夜日記・夜の鶴」講談社学術文庫1979（森本氏の論はこの本による。）

(9) 梁瀬一雄氏・武井和人氏「十六夜日記・夜の鶴 注釈」和泉書院1986（梁瀬氏、武井氏の論はこの本による。）

(10) 上村悦子氏「小式部内侍と周防内侍」『明日香』明日香社1975

(11) 最後の章段が書かれたことについて、森本氏は、「いろいろと作歌上の指導をしたあと、ふと思いついて、歌をよむ楽しさおもしろさは、即詠にあるということ述べた。・・・

入門書であったことをうち忘れ、おのずと思いはわが身に集中して、ああ、私の周囲にもそのような優雅な人がいたならばと、羨望のため息をついて、そのまま筆をおくということになった。筆者の吐息をそのまま聞くような調子がたまたまについて、一種おもしろい結末となっている。」と述べている。

また、梁瀬氏は「形式を調えた歌論の陳述は前章で結びが与えられたと考えるにふさわしいと思うので、この章は追記と見るべきであろう」と述べ、武井氏は「全篇で述べてきた『尚古思想』の総括としても、解せなくはないだろうが、やはり歌論の最後に置かれる言葉としては座りが悪い。『中略』ま

ずは未完と見て置きたい」としている。

(12) 冷泉家時雨亭叢書 第六卷『続後撰和歌集 為家歌学』内の『夜の鶴』を底本とする。写本には題名がなく、後世の人の手により『よるのつる』と号されたようだが、阿仏尼から為秀、為尹へと大切に書写され、歌道家の貴重書として受け継がれてきた歌論書である。

(13) 「あひしらふ」の用例は『十六夜日記』に「その世に見し人の子、孫など呼び出でてあひしらふ」（その当時知り合った人の子や孫など呼び出して、語り合った）と訳している。）とある。森本氏は「相手になる。」とし、武井氏は「調

子を合わせて相手をする。男性と和歌をやりとりすることである」としている。

- (14) 同一詠者の二対以上の男女の愛の歌が採られることはそんなにはない。恋の部で見ると、『玉葉集』では村上天皇と斎宮女御徽子女王が二対（二六〇七・二六〇八）（二六二二・二六二三）、『風雅集』は、藤原隆信とよみ人しらずが三対（一〇〇六・一〇〇七）（一〇〇八・一〇〇九）（二〇九二・二〇九三）ある。ちなみに『玉葉集』・恋の部での問と答えが対になっている贈答歌は二十一組（うち為家と阿仏尼は二組）、『風雅集』・恋の部での問と答えが対になっている贈答歌は十三組（うち為家と阿仏尼は三組）であった。
- (15) 小山順子氏「小式部内侍「大江山生野の道の」考・歌枕の機能、解釈、享受」（京都大学国文学論叢 2007）
- (16) 『無名草子』の小式部内侍論について鈴木弘道氏（『無名草子の小式部内侍評言私注Ⅱ』相愛大学研究論集1988）（『無名草子の小式部内侍評言私注Ⅲ』相愛大学研究論集1989）鈴木弘道氏「無名草子の小式部内侍評言私注Ⅲ」相愛大学研究論集1989は「よろづの人」（多くの貴公子）との接点があったことを実証し、また「真作にあらざる伝承歌がかなり説話・伝説類などに記録されていること自体、小式部内侍が歌人と

して評価されていたことを示している」と語る。「いかにせむ」の和歌を『十訓抄』は「一道一芸に秀でることの大切なことを教える教訓」とし、『沙石集』は「秀歌は神をも感動させその功德をもつて病も消滅する。功德談として仏教の尊さを説こうとしている」と述べている。三木紀人氏（『垂流の世代のアイドラー小式部』（『国文学』2016）は『無名草子』の作者は王朝四百年の歴史に排出した才女の最高を小式部内侍とし……立派な主人（上東門院）の寵愛、貴公子たちの慕情を一身に集めたこと、歌人としての才能、それに加えてその天折までもが彼女のすばらしさを見事に完結させた」と論じている。

(17) 現時点では仮説にすぎないが、今しばらくその仮説に従いたい。

(18) 例えば、『夜の鶴』の『新古今集』の特色は「むかしの歌のやさしきすがたに立帰て……」とし、『越部禅尼消息』の『新古今集』の特色は「御手づからなる詞づかひ、珍しくけだかう面白く」とある。また、『夜の鶴』では本歌取りの良い例とし、『源氏物語』（紅葉賀）の「袖ぬるる露のゆかりとおもふにもなをうとまれぬやまとなでしこ」を俊成卿女が本歌取りした次の和歌を紹介している。

さげばちる花のうき世と思ふにも猶うとまれぬ山桜かな  
『十六夜日記』長歌と奥書に俊成卿女も父の遺領でもめたこと  
の記載がある。俊成卿女は阿仏尼のように、訴訟ということ  
ではないが、武藏前司に不正の数々を裁断してくださいと  
いう次の和歌を詠んだことで、地頭の不法が停止させられた  
という。

君ひとりあとなき麻の数知らば残る蓬が数をことわれ

(19) 『千載集』では雑部に入集しているが『定家八代抄』(巻  
十二 恋二・九五四)では、恋部に配され、定家は恋歌と提  
えている。

(20) 稲賀敬二氏「周防内侍」『王朝歌人とその作品世界』笠  
間書院 2007

(21) 同じ話は『十訓抄』一ノ四十七話にある。『十訓抄』には「俊  
頼髓脳」にある内容を述べた後、近い例を漢詩を用い、次の  
ように述べている。

近くは中御門摂政殿も、

朝眠遅覚不開窓 朝眠、遅く覚めて窓を開かず

といふ詩を作り給ひて、いくほどなく御とものもりながら、  
頓死せさせ給ひにけるとぞ。

(22) 周防内侍が「われさへのきのしのぶ草」と詠んだ家は冷

泉堀川の北と西の角である。」といった内容。

(23) 竹鼻續氏『今鏡』下 講談社学術文庫 1984

(24) 『徒然草』第一三八段は、次のように引いている。

「祭過ぎぬれば、後の葵不用なり」とて、或人の御簾なるを  
皆取らせられ侍りしが、色もなく覚え侍りしを、よき人のし  
給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なり  
けり

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉を詠めるよ  
し、家の集に書けり。古き歌の詞書に、「枯れたる葵にさし  
てつかはしける」とも侍り。枕草子にも、「来しかた恋しき物、  
枯れたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひ寄りた  
れ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」  
とぞ書ける。おのれと枯るるだにこそあるを、名残なくいか  
が取り捨つべき。

この歌も、嘉吉三年(二四四三)に催行された、『前撰政  
家歌合』(夏逢恋 三七九 三八〇)を見ると次のように本  
歌取りされている。

百九十一番 左 持純

今夜こそみすのあふひをしるべにてかけけるよよの契を

もしれ

右 近衛

夏引のてびきのいとよるよるもあふは程なく明くるし  
ののめ

左歌は周防内侍、かくれどもかひなきものはもろと  
もにみすのあふひのかれはなりけり、と詠ぜるを思  
ひつるにや、ただししるべとしれといへる詞おなじ  
心にや、右歌、又ききふるせるすがたに侍り、なす  
らへて持とせり

(25) 本文は、田渕句美子氏『十六夜日記・阿仏の文』勉誠出版2009による。『阿仏の文』広本が阿仏尼真作。広本は阿仏尼が都で弘長三1263年～文永元1264年頃に、宮廷女房として出仕している一三歳前後の娘に対して書いた、宮廷女房の心得を具体的に説く教訓書で、和歌に関する教訓も少し含まれる。室町期に多く作られた女訓書の先蹤的な書物として読まれ、引用された。

(26) 阿仏尼が鎌倉に到着の後、これらの歌の返事が確かに届いている。

(27) 阿仏尼の伝記や著作については、田渕句美子氏『阿仏尼』吉川弘文館2009を参照。

(28) 『井蛙抄』は『歌論歌学集成』第十巻 三弥井書店1999による。

(29) 『菟玖波集』は『日本古典全書』朝日新聞社1951による。

(30) 奥田勲氏「女流」連歌略年表』『聖心女子大学論叢』1995

(31) 『吾妻問答』は『連歌論集 俳論集』岩波書店1983による。

(32) 『さがのかよひ』は『飛鳥井雅有日記注釈』（国語国文学研究叢書第四十巻 桜楓社1990）による。

(33) 九月十七日の条には『源氏』は「はじめんとて講師にとて女あるじ（阿仏房講師）を呼ばる。」とあり、九月十七日からの『源氏物語』の講義では、読み手として阿仏尼がよばれたとあり、女あるじと呼ばれていた。

(34) 注18参照。

付記

本稿は、平成三十年度関西大学国文学会で口答発表した内容をもとにしたものです。

（たきくら ともよ／本学大学院生）